

鴨東通信

春

2014. 4 No.93



●日常語のなかの歴史7

いとこ【従弟】

尾脇秀和

●てーたいむ

『作庭記』にみる中世人の自然観

白幡洋三郎

●エッセイ

蝦夷島を描いたユダヤ人地理学者の運命
香を取り巻く人々

岡美穂子
本間洋子

●リレー連載 世界のなかの日本研究17

近現代の欧米・国際関係研究から見た日本

松本佐保

●史料探訪 55

埼玉県行政文書と文書館の果たす役割

太田富康

大徳寺伝来 五百羅漢図

奈良国立博物館・東京文化財研究所編

※中国・南宋時代の寧波周辺の地において、淳熙五年（一一七八）からほぼ十年をかけ、全百幅が制作された「大徳寺伝来五百羅漢図」。卓抜した画技と豊かな彩色を誇る中国・南宋時代の仏教絵画を代表する名品として知られる。また画中に金泥で記された銘文により、制作背景・当時の社会状況が判明する点でも極めて貴重な資料。

※奈良国立博物館と東京文化財研究所との共同調査の報告書を大幅に増補改訂。論文・参考資料を追加・加筆のうえ、図版をより大きくし、高精細カラー印刷にて公刊。

詳細パンフレットを無料送付いたします。
パンフレットは小社HPにもアップします。

南宋時代の
仏教絵画を代表する優品

大迫力の大型図版を
高精細カラー印刷

- ◎米国の美術館所蔵分（一二幅）・江戸時代の補作（六幅）も含めた、全百幅を大型図版で紹介。
- ◎一点一点に画題と解説を付す。
- ◎部分拡大図（四〇点）・絹目画像（二七〇点）も高精細カラー図版で収録。
- ◎本調査により新たに存在が多数確認された銘文画像（四八点）を翻刻とともに掲載。
- ◎最前線の研究者による論文八本を収録。
- ◎伝来史料・年表・関連図版など、資料も充実。
- ◎美術史研究はもとより、東アジアの文化史・宗教史を考えていく上で大きな役割を果たす大著。



【6月刊行予定】

▼B4判・三一四頁／本体五〇,〇〇〇円

いとこ【従弟】

父母の兄弟姉妹の子をイトコという。漢字では年齢・性別により、従兄・従弟・従姉・従妹などと表記する。親戚として多数存在するため、会ったこともないイトコがいる場合も少なくない。

近世後期、身分相続の手続上でも、相続者として「従弟」が多く登場する。

昔も従兄弟がたくさんいた——という話ではない。彼らは不自然に多く、その上「従弟」間での相続をも繰り返した。実は彼らの多くは、前任者と何ら血縁関係のない、赤の他人だったのである。

近世社会においては、身分の世襲を建前としたが、実際には武士身分をはじめ、特権を伴う様々な身分が「株」として金銭で売買された。それでも相続手続上、相続者は前任者の親類であると称し、血縁者間による相続という体裁をとることを基本とした。

特に養子という擬制による相続が広く知られているが、他人を「従弟」と称して身分を相続させる方法も、常套手段として

日常語の歴史 なかの歴史

7

◎日常語のなかで、歴史的語源やエピソードを取り上げ、研究者が専門的視野から紹介します。

用いられた。前任者より年下、あるいはその体裁をとるので、「従弟」という表記が多くなる。ちなみに父系であることを示す「従父弟」、本当の従兄弟だと強調する「実従弟」、異姓の従兄弟を意味する「他家従弟」といった表現もみられるが、結局のところ、いずれも赤の他人であることが多いようである。

誰が始めたのかわからないが、非血縁者を血縁者だと偽る上で、従兄弟ほど便利な続柄もなかったろう。従兄弟なら他姓でも不自然でなく、また戸籍の役割を持った宗門人別改帳は、現在における同居家族間の続柄しか記さない帳面であるから、支配側による従兄弟関係の確認は容易ではない。もともと、こうした明らかに不自然な「従弟」相続が通用したのは、従兄弟関係という体裁をとることによって、表面上身分世襲の建前が維持されていれば、支配側もあえてこれを問題視せず、穏便に許容したからでもある。近世は、社会の建前が種々の調整行為により保たれていた。相続手続における多くの「従弟」たちは、そうした近世社会の特質を示す存在でもあったといえよう。

(尾脇秀和・佛教大学総合研究所特別研究員)

長年勤めてこられた国際日本文化研究センター（日文研）を今春退職され、日文研で主宰した最後の共同研究班の成果として『作庭記』と日本の庭園』を刊行されます。

——共同研究は日文研の特色の一つといわれています。

日文研は、一九八七年の創設当初から共同研究の拠点となることを考えていて、その特色を国際的、学際的、総合的と謳っています。

「国際的」というのは、日本国内の研究者だけでなく、海外の日本研究者も含めて、あるいは日本国内の研究成果だけではなくて、海外の日本研究者の議論だとか、そこから生まれてくる日本への新しい関心とかを取り入れること。「学際的」は、学問の諸分野・研究領域をできるだけカバーすること。「総合的」というのは専門的に一分野を掘り下げるだけではなくて、関連分野も含めて、しかも一般的・初歩的な疑問から専門的な疑問まで、総合的に目配りをしながら研究すること。

この三つを備えた共同研究をやるというのを目標にしていたわけです。

てい—たいむ

『作庭記』にみる中世人の自然観

しら は た よ う ざ ふ ろ う

白幡洋三郎

(中部大学特任教授・日文研名誉教授)

●白幡流・共同研究班の作り方

共同研究のテーマは、世の中の要請というよりは、強く自分が解き明かしたいと思うことを選ぶのがいいだろうと僕は思っています。ただ、あまりに自分と同じ意見を持った人を集めたら、国際・学際・総合の利点は弱まるわけで、やっぱり知らない専門分野については、自分の意図が許す範囲でその分野を分かりやすく解説してくれる共同研究員を選び、その人たちのレクチャーを受けて、みんなが自分の分野以外の知識を取り入れ、大きなテーマに立ち向かっていくというのが一つの理想です。

共同研究で一番難しいのは、研究テーマへの関心が伯仲したメンバーを呼べるかどうかということなのです。本当に知的格闘技をやりたいと思うのだったら、同等の幅広い好奇心を持った人を選ぶのが研究を高める手段だと思うのです。だから、そういう他流試合をするのにふさわしいメンバーを呼ぶための広い関心と学術交流関係を備えていることが求められる。

共同研究の出来不出来は代表者の度量とメンバーの選択にかかっていると思うわけです。

●吉田光邦研究班で学んだこと

——ところで日文研の共同研究は、かつての京都大学人文科学研究所（人文研）の雰囲気伝えてしていると聞きますが、先生の場合はいかがですか？

私自身は農学部で、人文研に所属してはいなかったのですが、人文研の研究会には若い頃にたいへん世話になりました。

一番最初に出たのは、科学技術史の吉田光邦さんの研究会「一九世紀日本の情報と社会変動」。タイトルはちよつと抽象的ですが、幕末・維新期に日本が技術的にも文化的にもどう変わったか、その諸相をいろいろな角度からみるというものです。吉田さん自身が理学部の天文学出身で、人文研の研究会ながら理系の人が多く集まっていました。

人文学と技術学の共同研究というのがほとんどまだ見られない時代でした。自分の考えを発表して、まったく違う角度から質問されるのがうれしいという人たちが集まった、そういう雰囲気でした。「それは知らなかった」という話を聞いている、自分の研究に自由に取り入れる冒険的喜びがいっぱいありました。

このとき研究会終了後の飲み会、二次会、三次会がすごく役に立つというのが分かりました。研究会とはパブリックな場所です、居ずまいを正して語らねばならない、堅苦しい感じがあるんですよ。そこでは本音を言いきるとエレガントでないと思われるし、お作法が必要なんです。そういう「お行儀」を取り払って、本音で議論できるのは研究会が終わってからです。初対面の人も多

いなかでは、懇親会をやることで突っ込んだ議論ができるようになる。単なる発表会だけでは共同研究は熟成しないし、本音で語り合えません。

●日文研で主宰する最後の共同研究班

——今回の共同研究「日本庭園のあの世とこの世」のねらいは？

論文集とその基となったシンポジウム「日本庭園と作庭記」では、平安後期の『作庭記』を大きくとりあげました。

『作庭記』の研究者は庭園学者や造園家が多いのです。研究も庭を作る側の観点でされているものが多い。今回は飛田範夫さんや小野健吉さんなど、まさに庭園史・庭園学をやっている、実際に工事も施工もやっている人たちが、中心メンバーになっています。

そもそも飛田さんが『作庭記』の原作者を推理する論文を書かれて僕に送ってくれたのがきっかけで、いつか彼に他流試合をしてもらおうと思っていました。今回のメンバーでは、錦仁さんは和歌からみるし、荒木浩さんは物語文学から、原田信男さんは民俗学、宗教行事などに関心をお持ちだし、多田伊織さんは中国史……、とにかくそういうふうに僕に知っている範囲で『作庭記』に興味を持ちそうな人と、これまで『作庭記』を造園や庭園史の分野で深く研究してきた人の交流を促そうと企画しました。

じつは僕自身は『作庭記』を本格的に研究したことがありません。もう四〇年も前でしょうか、林屋辰三郎さんの『古代中世藝

術論』（岩波日本思想大系）に『作庭記』が翻刻された。それを読んでみると不思議な言葉がいっぱい出てくるわけです。そこに現れてくる自然観というのが、ざっと読んだときにはあふかつたと思うのですが、よくよく読み返してみるとじつは難解で真意がはかれないという、奥深いところがあるんですね。

まだまだ『作庭記』を読むのには

基礎知識がいるなど感じているのですが、成果報告を出版すれば、いっぱい欠点をみつてくれる読者がいるであろう、次の研究者が必ずや生まれるであろうと思って、頑張つて公にしようということとで出版に踏み切ったのです。「そんなことも知らんのか」というような無知をさらけ出す「蛮勇」をもってやっているんです（笑）。



引越しを控えた研究室の本棚を背に

●『作庭記』の魅力

『作庭記』というのは平安後期の貴族が、貴族の館の庭園について書いたらしいという説が定着しつつあります。出てくる用語は文芸用語ではなくて、おそらく当時の土木とか庭造りの技術用語です。そういう言葉遣いが記録された文献には、従来の日本文学研究の題材であった物語や和歌などとは違う語彙がいろいろあって、そうした用語には、技術のあり方や理想が表現されてい

る。だからこれまでの文学史・思想史・宗教史という、文字を扱いながら思想を語っていた分野にとっても新しい研究素材になると思います。

当時の造園というのは、石の組み方とか川の流れの制御であるとか、土木・建築技術的な最先端の用語を含んでいるはずですよ。そういう中にこれまで探られたことがないような、新しい思想的背景をもつ言葉がいろいろ出てくるのではないかなと思うのです。『作庭記』には文学的なようで、またそれだけではない意味を含んでいる言葉が出てきます。当時の日本人にとつての自然とか自然らしさとは何かが表れているように思います。日本の庭園は当時の自然観を客観的に分析した造形表現として作られている。『作庭記』は自然を再現する極意が書かれた、世界でも非常に早い時期の造園理論書といえるのです。

●中世人の自然観

日本庭造りというのはほとんど自然の模倣的な性格をもっているわけですが、『作庭記』には模倣すべき自然とは何かという自然哲学が出ていると思うのです。

たとえば「生得の山水をおもはへて」という言い方が出てきます。「生得」というのはもともと存在すること、「山水」とは景観・風景だと思ふんですけど、景観・風景とだけいってしまつと視覚的なものになつてしまふ。「生得の山水」というのは、もつと広い意味での客観的な自然を表しているようです。僕は「天然」と

という言葉を書いたのですが、それを考えて山（築山）を築きなさい、と書いてある。

重要なのは天然をそのまま模倣しろとはいっていないことです。「生得の山水」すなわち「天然」を「おもはえて」庭を造れといっている。そもそも「天然」であることが優位、上位であるというのだったら、人間には庭園造りなどできるわけがありません。しかし、ではなぜ人工的に作るのか？「生得の山水」を思いながら、どんなふうにする？という問題には、ストレートには答えが書かれていない。たぶん全体の中でそれは表現されている。深い思索の上でこの一行が書かれているという感じがしてくるわけです。

そういうふうにとつとつこの言葉や表現や文脈を分析していくと、中世人たちの自然観がたいへん深い自然観察の上にできあがっていたということがわかってくる。中世人には豊かな自然理解があったのです。

●日本庭園のあの世とこの世

——共同研究のタイトル「あの世とこの世」とは？

あの世っていうのは理想世界の見方なんです。あの世という死後の世界みたいに誤解されるかもしれませんが、この世の悪い面が払拭された理想世界という感じですね。此岸に対する彼岸、現実世界に対する理想世界など、その対比で物事をみてみようと思っただけです。

この世というのは現実、この世界、『作庭記』が書かれたとき

の現実世界。そうでない世界の理想化が記述のエネルギーの元となっている。

『作庭記』の独特の哲学を表した用語に「石のこはん（乞わんにしたがひ）」というのがあります。あたかも石が意欲・意思を持っている、石が「こうしてくれ」という求めに応じて石を立てると書いてある。そういう石の「主体性」とでもいうべき考え方というの、ほかに世界中で書かれたことがあるでしょうか。

石を立てるというのは高いところを作るということです。神のよりしろをより天に近いところを作る、神が降りてきやすくなる、という意味がある。では、どういうふうに立てたらいのかというのは石に聞かなければならない、ということです。これは主体性のような客体性のような、自力型か他力型か、どうもそんな単純な二分法では説明できない美学です。

庭造りが、ただ享楽の場を作るためだけに行われるものであったとすれば、これほど深い思想は生まれなかったかもしれない。つまりあの世とか神とか、我々の知らない超越的な存在との対話をどう可能にするかで、石ひとつ置くについても悩み、考え抜いて出てきた言葉が、「石のこはんにしたがひ」だと思えば、やっぱりこの世界とは違う他の世界があるという思いがこういう言葉を選ばせるんだと思うのです。だから「あの世」というのは、日本庭園をより高度な美的に完成された芸術作品、生活作品に高めていくための大事な糧だったと思うのです。

（二〇一四年三月一九日 於…国際日本文研究センター）

蝦夷島を描いたユダヤ人地理学者の運命

岡 おか
美穂子 みほこ

蝦夷島が初めて世界の地図に登場したのは、管見の限り、

一五六一年、バルトロメウ・ヴェーリヨ作『世界図』（フイレンツェ・美術アカデミー所蔵）においてである。バルトロメウは作者の名前であるが、ヴェーリヨというのは「老」という意味のポルトガル語の形容詞である。多様性に富むとはいえないポルトガル人のファーストネームには、このように愛称的に形容詞が付け加され、歴史上の人物などでは、あたかも苗字のように定着することも稀ではない。バルトロメウには、正式な姓があつたはずであるが、一六世紀の著名な地図制作者・天文学者として、彼は「バルトロメウ」という名で歴史に名を刻むことになった。

バルトロメウが地図制作者として活躍した一六世紀中葉、ポルトガルは大航海時代の真っ只中、インド・東南アジア産の香辛料、中国産の絹製品や陶磁器などを、各地の港に寄港しながらヨーロッパへと運び、アジアでは域内交易ネットワークに参入するなど、世界各地にネットワークを張りめぐらせていた。同時に、港町リスボンへとたたらされる世界の最新情報は、地理学の発展を促し、王室の支援を受けたリスボンの工房で制作される地図は、

ヨーロッパの最高水準を誇った。

この時代、ポルトガルの地図制作者の大半がユダヤ教徒からの改宗者である「新キリスト教徒」であつた。

中世ヨーロッパにおいて、当時の世界の最新情報を反映した画期的な世界図として知られる「カタロニア図（一三七五年）」を制作したクレスケス一族は、マヨルカ島でユダヤ人地理学者集団を束ねていたが、同島を支配下に置いたアラゴン王国内で、反ユダヤ運動が顕著になった一四世紀末から一五世紀初頭、強制改宗を厭ったクレスケス家の一部は、ポルトガルへ渡った。

同時期、ポルトガルでは海洋進出が活発化し、エンリケ航海王子がヨーロッパ各地の知識人、技術者を招来して、海洋学の隆盛を図っていた。その中には、マヨルカ島の地理学者や反ユダヤ主義が吹き荒れるスペイン地域からの亡命知識人も多くあつた。ポルトガルの大航海時代の基礎は、このようなユダヤ人学者によって築かれたといっても過言ではない。

スペイン地域から亡命してくるユダヤ人をポルトガル国内に庇護した事実、財政その他の面でもポルトガル宮廷に大きな利益

をもたらしたが、統合されたスペイン王室との婚姻による関係強化で、一五世紀末以降はポルトガルのユダヤ人たちもそれまでの自由は享受しえない状況になった。とはいえ、国内からのユダヤ人離散を危惧した宮廷は、キリスト教への改宗者には深い穿鑿（せんさく）をおこなわないこととし、キリスト教徒でありながらも、ユダヤ教徒としての伝統的生活習慣を維持する「マラーノ」たちがポルトガルにとどまることになったのである。

ところが不思議なことに、バルトロメウが描いた蝦夷島を含む、当時の最新情報が盛り込まれた世界図は、ポルトガルには一点も残っていない。現在、バルトロメウ作として知られる『世界図』と中央に地球を配した『天球図』が残っているのは、フィレンツェとパリである。それどころか、日本列島の情報として蝦夷島が早くも一五六一年に描かれたにもかかわらず、その後ポルトガルで制作された世界図には、その情報は継承されなかった。バルトロメウの日本周辺に関する知識を直接継承した最初の地図は、アントワープのアブラハム・オルテリウスの工房で制作された『太平洋図（一五八九年）』である。

このミステリーは、バルトロメウの生涯の晩年と密接な関係があると考えられる。正確な時期は不詳であるものの、一五六〇年頃、バルトロメウはフランスのボルドー地方へ移住した。ボルドーには同時期に多くのユダヤ人がポルトガルから移住したことが知られている。ポルトガル国王ジョアン三世が没すると（一五五七年）、その王妃であったスペイン国王カルロスの子カタリーナが、幼い

孫王の摂政として政権を執り、ポルトガル宮廷内でのスペインの影響力が増大した。それにともなう、異端審問もまた峻烈化し、多くの「マラーノ」が低地地方、マグレブ、新大陸、そしてアジア等へ離散していった。

その状況とバルトロメウの亡命は無関係ではなかったはずである。一時的ではあったが、フランス王アンリ二世は、自国の経済振興を目的に、ポルトガルからのユダヤ人の移住を歓迎した。アンリ二世自身は一五五九年に没したが、その後の政権を摂政として継承したカトリヌ王妃、いわゆるカタリーナ・デ・メディチがバルトロメウの晩年のパトリオンであったとすれば、バルトロメウの作品のうち一点が現在フィレンツェにあることにも納得がいく。

バルトロメウは一五六八年二月にナントで没した。その晩年はカタリーナという奇しくも同名の王妃二人に翻弄されたものであったのかもしれない。

（東京大学史料編纂所助教）

香を取り巻く人々

このほど、拙著『中世後期の香文化——香道の黎明——』を上梓することとなった。香道は香木を炷き、その香りを鑑賞する日本独自の芸道である。香道の起源となる中世後期（室町・戦国時代）について、公家の日記などの一次史料から、当時の香のあり方を実証的にみた内容となる。

中世後期の香は、①香会、②薫物と匂い袋の下賜、③香木の献上の三つに大別でき、それぞれを象徴する意外な人物が登場して来ることを紹介してみたい。

禁中をはじめ当時の香会では、組香（複数の香木を組み合わせて構成し、香りの違いを当てる）の基礎である十炷香が行われているなか、「源氏香」の原型が永正年間にすでに作られていた。その「源氏香」は、右京大夫細川高国が、香の異同を表す図式の「香図」に『源氏物語』の内から名を付けるよう依頼し、前関白近衛尚通がその名を考案したものである。

細川氏庶流の出身であった細川高国は、応仁の乱後の最大の権力者細川政元の猶子である澄之を滅ぼし、同じく政元猶子の澄元を追放した。足利義尹を擁立した大内義興が入京し、義尹が征夷

本間洋子

大將軍に復職すると高国は管領として、義興とともに幕政を掌握する。その後、細川政賢らと連携した澄元が京を攻撃するものの、船岡山の戦いで澄元方を完敗させ、一時的な安定期を迎えていた時期のことである。

一族の争いを繰り返しながらも、細川高国には猿楽や犬追物・鷹狩・和歌・連歌等の多岐にわたる文芸活動がみられるが、「源氏香」の成立に深く関わるという一面を持っていた点は見落されてきた。禁中を中心とした公家の遊戯であった香に『源氏物語』という新たな趣向を加える提案をしたのが、武家の細川高国であることも、もっと注目されてよいのではないであろうか。

薫物は、沈香や白檀等の香木や香料を粉末として蜜や甘葛で練り合わせた練香である。王朝時代の香の主流となったものであり、『源氏物語』梅枝巻には、薫物の優劣を競う薫物合が描かれている。だが、南北朝期以後は、香木そのものの香りを鑑賞することが主流となつて、薫物は廃れたとされていた。

ところが、実際には正親町天皇期・後陽成天皇期をピークとして、数多くの薫物が天皇により調合され下賜されている。薫物は

姿を消してはおらず、むしろ王朝時代の薫物文化が復活したかのような状況となり、室町幕府崩壊後、新たな勢力が政権を掌握すると、その武家へ天皇から薫物下賜が行われるようになる。

それは、織田信長の入京後にはじまる。信長の禁裏修理や金銭献上に対し、天皇は勅作の薫物を贈った。これを信長がことのほか喜んだことがきっかけとなって、その後も天皇からの薫物下賜は豊臣秀吉、徳川家康へと続いていく。

信長家臣の村井貞勝から「た、いくたひもたきものを」と、信長へは他ではなくとにかく薫物を何度でも下賜してほしいとの申し出があったことも記録されており、信長の上洛に合わせて勅作された薫物が贈られている。信長は、正倉院蔵の名香蘭奢待の截香（香木の切斷）も行っており、香に強い関心があったといえる。加えて、天皇家ゆかりの蘭奢待や王朝時代以来の歴史を持つ勅作の薫物を所持することをステータスとして、満足を得ていたのであろう。

また、天皇は粉末にした各種香料を入れた匂い袋の下賜も行っているが、薫物とは異なり、村井貞勝を筆頭に政権把握者の家臣に多く贈られている。匂い袋は、そのままの状態で香するため、薫物のように香炉を用い火加減に留意して炷く必要がなく、簡便な下賜品として重宝されていた様子である。

薫物や匂い袋は小さな物ではあるが、戦国期以後の動乱の時代に天皇自ら調合し、朝廷の無事を託した下賜品でもあった。下賜された薫物や匂い袋は、天皇との間柄が近いことを示す恰好の

品となり、さらなる下賜の連鎖が生まれたことも想像される。

一方、連歌師宗祇は薫物の調合にも長けていた。宗祇が催す香会では、香の香りを鑑賞しながら和歌を詠む、炷いた薫物がその芳香を放っている間と刻限を定めて連句を詠み競うといった、香りと文学との融合ともいえるべき利用法もみられる。後に、文学を主題とした組香が多数創作される発端となるものであろう。

十炷香などの香会では、香木である沈香が炷かれる。薫物の主材料でもある沈香は、すべて東南アジア原産の舶載品であり、価値を持った贈答品として天皇家へも献上されている。中世後期には、香木は琉球に集積された後に日本へと輸入される中継貿易の形式がとられたが、琉球貿易に関与していた大内氏、特に大内義興からの献上が多数を占めている。大内氏の領国を含め、西国・九州へ下向した人々からの帰洛土産に沈香が多いのも、その輸入経路を示しているのである。

自国では産出しない沈香を和歌や物語などの国文学と結び付けて組香を作り、世界に比類のない香道という芸道となつて現在に受け継がれてきているのも、実に不思議なことである。

最も有名な組香である「源氏香」の原型を作ることを提案した細川高国、薫物復活のきっかけとなった織田信長、香りと文学の融合を図った宗祇、沈香の輸入に関与していた大内義興など、これまでの香道史の表舞台には登場しない、むしろ政治史や文学史で著名な人物によって中世後期の香が支えられ発展していったのである。

（武蔵大学総合研究所研究員）

近現代の欧米・国際関係研究から見た日本

松本佐保

日本はキリスト教国ではないのに、欧米の文化や歴史、政治・経済研究が盛なことからその宗教への関心は高い。筆者が昨年拙著『パチカン近現代史』（中公新書、中央公論新社、二〇一三年）を出して予想外の部数が売れたことから、一般的な関心も含めてその高さがうかがえる。

そうは言うものの、日本におけるパチカンやキリスト教研究は宗教研究に終始しており、特に近代以降、宗教が政治や経済などの世俗的な世界とどう関わっているかについては、それほど研究されていない。これは、日本では欧米の近代化＝世俗化というイメージであり、近現代の時代に政治や経済に宗教が関わっているという認識が低いためである。

しかし例えば、今日の米国の政治や選挙に妊娠中絶の問題が影響することや、国際関係学の研究分野で近年注目度が高い人道的介入の問題など、その背景にはキリスト教的価値観が強く働いている。近現代の欧米社会は、教会に行く人口が激減するなど、世俗化しきったと思われている人も少なくないが、キリスト教的政治文化という形で、一見宗教に見えなくとも、それは欧米の文

化と不可分なのである。

つまり世俗的なものと宗教的なものの境目は近現代の時代になると、どんどん曖昧になっていくのだが、だからと言って宗教的なものが消滅したわけではない。国際関係研究で宗教というトイ斯拉ム研究ばかりが注目されるが、見えにくくなった形で欧米の政治・経済文化の中に宗教、つまりキリスト教的なものは存在する。日本もまた世俗化しきった社会と思われがちであるが、靖国問題など政治の場に宗教が入り込んでいることは否定できない。

近年、欧米の学界で国際関係研究における宗教の重要性は強調されるようになり、例えば冷戦研究にとつて宗教、キリスト教の役割の重要性が指摘されている。カトリックに関して言えばその反共産主義のイデオロギーは、西側諸国の軍事的な反ソ連姿勢を支えていたことになるからだ。

この様に、私の関心は宗教という一見「近代化」や「グローバル化」と相反するものが、実は、いかにこれらと深く関わっているかを明らかにすることである。パチカンがそのグローバルなネットワークによって国際政治に影響を及ぼしている点を示すこ

とで、宗教の重要性への理解を日本の読者にも深めてもらいたいのである。

宗教の次に関心があるのが、美術やアートと国家権力の関係である。拙論「近代国家と博物館・美術館」(『世界の蒐集』福井憲彦監修、山川出版社、二〇一四年)では、大英博物館などの遺跡出土品や美術品の収集に、英国の外交政策や軍事力がいかに発揮されたかを論じた。従来の政治・外交研究では美術品や文化的要因を軽視してきたし、また文化・美術史研究では政治・外交的側面を汚らしい権力の世界として嫌悪してきたが、権力なきところに芸術は生まれず、国家をスポンサーとした博物館や美術館が多く存在し、外交と美術収集は不可避的に結びついていることを示した。このような宗教や芸術などの文化と外交の役割については、国際関係研究ではソフトパワーやパブリック・ディプロマシー研究として、欧米でも日本でも盛んになってきている。日本の国際関係や国際政治研究の学界が発行する『国際政治』に掲載した拙論「イギリス外交における文化的プロパガンダの考察」(『国際政治』一七三号、二〇一三年)では、第一次世界大戦前から戦中に英国がイタリアで行った文化的プロパガンダ、また第二次世界大戦中に英国が米国を参戦させるために行ったパブリック・ディプロマシーについて扱い、これらが戦争などの国際関係の節目で大きな意味を持ったことを示した。

著者の専門は欧米研究が中心であることから、英語で執筆した著書や論文を単純に日本語にするだけでなく、右で示した様に、

日本の学界や読者に理解してもらう文脈でいかに書き換えるかに腐心してきた。唯一日本に関わる研究である拙論「白人優位主義へのアジア主義の対応」(『アジア主義は何を語るのか』松浦正孝編著、ミネルヴァ書房、二〇一三年)では、米国と英連邦に共通に見られたアジア移民排斥が国境を越えて白人優位主義ネットワークを形成したこと、そして日本のアジア主義がこの白人優位主義への反発によって急進化したことを明らかにした。

こうした視点は日本側だけの研究では着想し難いだろうが、その意義は、英連邦の白豪主義と米国の排日移民法に直接的関係性を見出したことにある。つまり欧米の研究を専門としているからこそ、日本を世界の中でどう位置付けるかが解ったのではないかと思ったりする。

日本や欧米の学界における日本研究で、日本だけが何かユニークな存在であるかの様な論調が時々見受けられる。しかし全ての国や文化がユニークであり、日本だけが独自のであるということはない。それは宗教にせよ、芸術や文化にせよ、人種問題にせよ、日本を例えば英国や英連邦、イタリアやバチカンと比較してみれば、必ず共通的就出せるはずである。特に国際関係や外交研究では、二国間や多国間関係の中で日本を単なる一国として扱うことになり、逆にこの様な視点から、世界の中の日本がよく見渡せることがあるのである。

(名古屋市立大学人文社会学部教授)

史料

探訪

(55)

埼玉県行政文書と

文書館の果たす役割

太田富康
おお たくみ やす

(埼玉県教育局生涯学習文化財課主幹)

一八七一年の立庁以来二二世紀の今日まで、埼玉県は膨大な文書を作成してきた。それらの文書のうち、証拠資料として、あるいは、事業運営上の資料として重要なものは、永久保存の記録として管理されてきた。別に編纂された記録ではなく、県政という組織活動を遂行するためにリアルタイムに作成され施行された文書であり、それ自体を簿冊等に編綴した記録である。歴史学をはじめとする学術研究や地域研究にとって、最も優れた一次資料といえる。一九六九年の県立文書館開館以来、ひろく県民や研究者の閲覧利用に供されている。

このうち、地方自治法が施行された一九四七年までの文書一、二五九点は、国の重要文化財に指定されている。県職員が日々の業務の中で事務的に作成した文書でありながら、それらが体系的に管理され保存されてきたがゆえの評価といえよう。なかには、今年一三〇周年となる秩父事件に関する記録(写真)のように、歴史上の著名な事件に関するものもあるが、多くは、現在でも同様の行政事務の中で作成され続けているような文書である。もちろん一九四七年で資料群が完結しているわけではなく、そ

の後も継続的に文書館へ引き継がれ続けている。点数を一定にとどめることなく増加し続ける性格のものであり、現在では一六万点を超えている。この「文書のライフサイクル」は県の文書管理として制度化されており、今後も毎年定期的に続いていくことになる。一定の年月を経過し、評価の定まった歴史資料を収集・保存するのではなく、現在の資料が未来の歴史資料となるという観点に立ち、その作成段階から関与し保存を開始する、というスタンスである。

誤解があつてはいけないのが、未来の歴史研究者のために封印してただ保存しておく、というものではないことである。文書は、未来の利用者にとつての歴史資料であると同時に、というよりもそれ以前に、現代の利用者にとつての資料である。文書は第三者の研究のために作られるのではない。組織や個人の活動の必要から作られるものである。そして、その活動にとつての業務的、法務的、あるいは証拠的価値から保存され、利用されるのが第一義といえよう。

とくに公文書の場合、組織というと直接的には省庁や県庁など



重要文化財「埼玉県行政文書」のうち、「秩父暴徒関係書類」および「秩父暴動始末」(資料番号 明 946 ~ 950)

を指すことになるが、国や自治体は国民・住民を代表し、あるいは、その付託を受けて行政等の活動を行っているものである。その活動の所産であり、その活動を証明する公文書は、国民・住民の資料でもある。それゆえ、文書作成当初から公文書管理制度と情報公開制度によって、さまざまに利用され続けながら保存されていくものである。

しかし、年月とともに業務的な価値などは減滅し、一方で歴史的・文化的な価値が増してくる。歴史的・文化的な価値は、当事者組織や直接利害関係にある住民に限定されない普遍的な価値であり、外部の研究者等にとっても必要かつ重要な資料となる。公文書でなくとも、文書は組織・個人の内部資料から公共の共有資源へと価値を拡大していく。このような段階にいたった文書を「アーカイブズ」(日本語では「記録資料」「記録史料」など)と呼ぶ(もちろん、作成後間もない段階から歴史的価値を認められる文書もあるから、一定年月の経過がアーカイブズたる必要条件ではない)。

また、その保存や利用提供を行う機関もアーカイブズと呼ばれる。埼玉県では「文書館」と命名したが、国や自治体では「公文書館^{しよかん}」の方が一般的となってきた。前述したように住民の共有資源である公文書は、学術研究や郷土学習のための資料たる以前に、住民に対して国や自治体が説明責任を果たしていくための、まさにその「証」たるものである。国や自治体のアーカイブズは、その責任を将来の国民に対しても果たしていくため、公文書の保存公開に力点を置くことになる。その意味で、「公文書館」は、民主主義や地方自治を支える重要な装置であるといわれる。

しかし、アーカイブズとして永久保存され、ひろく公開されるにいたるまでの道程は、放っておいて自然調和的にできあがるものではない。膨大な文書のなかから保存すべき価値のある文書を評価選別すること、適切な保存環境や措置をとり文書を物理的に

保全していくこと、公開を控えるべき情報を適切にチェックしながらも広く閲覧利用に供していくことなど、多くの専門的業務が総体となつてはじめて可能となる。この業務活動の総体を組織化したものが文書館である、ともいえるであらうか。

その専門的職能の重要な要素のひとつに編成記述論がある。アーカイブズは、もともと組織内部や当事者間でやり取りされた情報媒体であり、それ以外の他者による利用を前提としていない。その情報を、時空を隔てた第三者が理解することは容易ではない。当事者が理解しえたと同レベルで獲得することは不可能といつていいであらう。編成記述論とは、閲覧利用者ができるだけ情報を理解しやすいよう、目録や検索システムなどを編成し、必要な資料情報を効果的に提供するための方法論である。そのために文書館は、その資料群の調査分析を通じて、作成母体組織との関係に即して構造を説明し、さらに、それを適切に編成し記述することが求められる。

その作業の困難さは、すでに組織が消滅してから長年月が経過し、その組織の構造や歴史的背景の詳細をしないことのできない資料群において際立つことになる。日本におけるアーカイブズ学研究を先導する国文学研究資料館では、その顕著な例である近世の資料群を主たる対象とし、「近世地域アーカイブズの構造と特質」をテーマに共同研究を行った。その三年間の成果が『アーカイブズの構造認識と編成記述』として三月に刊行された。参照いただければ幸いである。

— MEMO —

埼玉県立文書館

さいたま市浦和区高砂4-3-18

TEL 048-865-0112 FAX 048-839-0539

ホームページ <http://www.monjo.spec.ed.jp/>

開館時間 午前9時～午後5時

休館日 月曜日、祝日、年末年始（12月29日～翌1月3日）

特別整理期間（春・秋 各10日間以内）

入館料 閲覧・展示とも無料

一九六九年に全国で四番目の都道府県文書館として開館。埼玉県地域の中近世から近現代に及ぶ古文書類、明治初年以來の県の行政文書（公文書）・行政刊行物のほか、県域を中心とした地図・航空写真、『新編埼玉県史』編纂時の収集資料、埼玉新聞社撮影の戦後報道写真など、一三〇万点を超える記録資料を収蔵している。

文書閲覧室および地図閲覧室での閲覧利用のほか、展示室では常設展示と年四～五回のコーナー企画展示を行っている（『中世文書の世界Ⅱ 戦国時代の文書』を6月1日まで開催中）。また、史料集『埼玉県史料叢書』全二〇巻を刊行している。最新刊は「古代・中世新出重要史料二」。

12月から3月にかけて刊行した図書

図 書 名	著 者 名	ISBN978-4-7842	本体価格	発行月
老農・中井太郎と農民たちの近代 仏教美術を学ぶ	大島佐知子著	1710-6 C3061	7,500	12
南蛮・紅毛・唐人 牛と農村の近代史	中野玄三・加須屋誠著	1720-5 C1071	3,000	12
写しの力	中島楽章編	1681-9 C3020	6,800	1
大正・昭和期の日本政治と国際秩序	板垣貴志著	1725-0 C3021	4,800	1
日本古代文書研究	島尾新・彬子女王・亀田和子編	1711-3 C1070	4,000	1
源平の時代を視る	武田知己・萩原稔編	1717-5 C3031	6,500	1
朱印船貿易絵図の研究	渡辺滋著	1715-1 C3021	9,200	2
室町幕府の東国政策	磯水絵・小井土守敏・小山聡子編	1735-9 C3095	4,800	2
近世の禁裏と都市空間	菊池誠一編	1712-0 C3020	7,800	2
日本中世の領主一揆	杉山一弥著	1739-7 C3021	7,200	3
西鶴の文芸と茶の湯	岸泰子著	1740-3 C3021	6,400	3
近代古墳保存行政の研究	呉座勇一著	1721-2 C3021	7,200	3
交錯する知	石塚修著	1730-4 C3095	6,000	3
古代日本の衣服と交通	尾谷雅比古著	1734-2 C3021	7,200	3
アーカイブズの構造認識と編成記述	武田佐知子編	1738-0 C3021	12,000	3
	武田佐知子著	1723-6 C3021	6,800	3
	国文学研究資料館編	1736-6 C3021	6,700	3

12月から3月にかけて刊行した継続図書

シリーズ名	配本 回数	巻数	巻タイトル	ISBN978-4-7842	本体価格	発行月
住友史料叢書	28	28	年々諸用留十一番	1727-4 C3321	9,500	12
技術と文明	34	34	18巻1号	1742-7 C3340	2,000	1
佛教大学研究叢書		22	近世京都近郊の村と百姓	1731-1 C3021	4,800	3

(表示価格は税別)

書評・紹介一覧 12～3月掲載分		※(評)…書評(紹)…紹介(記)…記事〔敬称略〕	
阿蘇下野狩史料集	(評)『信濃』66-3号(花岡康隆)	京舞井上流の誕生	
(評)『日本歴史』12月号(中澤克昭)		(紹)「毎日新聞」朝刊 12/22	
医療の社会史	(紹)『日本医学雑誌』59巻4号	(記)「京都新聞」12/23	
(紹)「日医ニュース」2/5		(記)「毎日新聞」夕刊 1/6	
牛と農村の近代史	(記)「読売新聞」夕刊 1/21	近代京都の施薬院	
(記)「日本農業新聞」2/2		(紹)『醫譚』98号	
(記)「山陰中央新報」2/4		(紹)「京都民報」12/22	
(記)「中国新聞」2/12		(紹)『京都医報』No. 2024	
写しの力	(紹)「日医ニュース」3/5	近代日本の歴史都市	
(紹)『月刊美術』3月号		(記)「読売新聞」夕刊 1/21	
(紹)『月刊水墨画』4月号		憲政常道と政党政治	
栄花物語・大鏡の研究	(紹)『古代文化』65巻4号	(紹)『年報政治学』2013-II	
紙——昨日・今日・明日——	(紹)『月刊美術』1月号	(評)『日本歴史』790号(土川信男)	
後鳥羽院政の展開と儀礼	(評)『日本歴史』789号(白根靖大)	野村得庵の文化遺産	
近代の「美術」と茶の湯	(紹)『日本民俗学』277号	(紹)「日本古書通信」12月号	
(評)『茶の湯文化学』21号(田中秀隆)		早池峰岳神楽の継承と伝播	
戦国大名権力構造の研究	(紹)『日本歴史』790号(土川信男)	日本中世の社会と寺社	
(評)『古文書研究』76号(芝裕之)		(紹)『史学雑誌』123編2号	
中世の契約社会と文書	(紹)『史学雑誌』123編2号	平安時代貿易管理制度史の研究	
(紹)「松本平タウン情報」3/4		(評)『史学雑誌』123編2号(榎本淳一)	

老農・中井太一郎と農民たちの近代 (記)「山陰中央新報」2/11 (紹)「日本農業新聞」2/16	仏教美術を学ぶ (記)「奈良新聞」1/30 (記)「読売新聞」2/2 (紹)「中外日報」2/22 (紹)「仏教タイムス」3/6 (紹)『月刊美術』4月号 (紹)『月刊水墨画』2月号
東国における武士勢力の成立と展開 (評)『古代文化』65号4巻(長村祥知)	
南蛮・紅毛・唐人 (紹)『マカオ通信』2月号	
日本古代典籍史料の研究 (評)『古文書研究』76号(小倉真紀子)	

営業部より・編集後記

☆学会出店情報

※出店学会・出店日は変更の可能性有

美術史学会(早稲田大学) 5/18(日)

社会経済史学会(同志社大学)

中世文学会(早稲田大学) 5/24(土)・25(日)

歴史学研究会(駒沢大学) 5/24(土)・25(日)

日本医史学会総会(九州国立博物館) 5/31(土)・6/1(日)

芸能史研究会(同志社女子大学)

東南アジア学会(南山大学) 6/1(日)

大阪歴史学会(関西学院大学) 6/7(土)・8(日)

▼「ていーたいむ」収録では長時間にわたり『作庭記』の魅力を語っていただきました。今回の誌面はダイジェスト版、つづきは『作庭記』と日本の庭園で!

▼今夏から祇園祭山鉾巡行は前祭・後祭の二度行われる。この古式復活には歴史的研究発展の成果も? 個人的には屋台出店も延長希望! (大)

▼円山公園、白川沿いに二条城と、京都の春は桜が綺麗で楽しいです。来年はどこに行こうかと今から次の計画を練っています。(M)

▼表紙図版・横山松三郎「丁髷の男と外国人」(写真油絵・コラージュ/個人蔵)

■定期購読のご案内■

『鴨東通信』は年4回(4・7・9・12月)刊行しております。

代金・送料無料で刊行のつどお送りいたしますので、小社宛お申し込みください。バックナンバーも在庫のあるものについては、お送りいたします。詳細はホームページをご覧ください

おうとうつうしん

鴨東通信 四季報 No.93

2014(平成26)年4月30日発行

発行 株式会社 思文閣出版

〒605-0089

京都市東山区元町355

tel 075-751-1781

fax 075-752-0723

e-mail pub@shibunkaku.co.jp

http://www.shibunkaku.co.jp

表紙デザイン 鷺草デザイン事務所

古代日本の 衣服と交通

装う王権 つなぐ道

武田佐知子著

【3月刊行】

衣服と交通、そしてそこから派生する諸問題をテーマに、大阪大学を退職した著者の長年の研究成果を集成。



内 容

- 【第1部 古代国家と交通】
- 第1章 古代における道と国家
第2章 古代における都と村
第3章 二つのチカシマに関する覚え書き
第4章 古代環日本海交通と淳足櫓
- 【第2部 民族標識・異性装】
- 第1章 「魏志」倭人伝の衣服について
補論1 「二遍聖絵」に見る時宗の衣服
第2章 日本古代における民族と衣服
第3章 律令国家と蝦夷の衣服
第4章 奉翳美人の「男装」について
第5章 男装の女王・卑弥呼
- 【第3部 王権と衣装】
- 第1章 大化の冠位制について
第2章 王権と衣服
第3章 古代天皇の冠と衣服
第4章 服飾と制度
補論2 笠の山

▼A5判・四二〇頁／本体六、八〇〇円

たけだ・さちこ：一九四八年生。東京都立大学人文科学研究科博士課程修了（史学専攻）。現在、追手門学院大学国際教養学部教授。

交錯する知

衣装・信仰・女性

武田佐知子編

【3月刊行】

編者の大阪大学退職を記念し、学縁に連なる31名が衣装・信仰・古代史の諸相・女性・文化の交錯をテーマに最新の研究成果を持ち寄る。



執 筆 者

- 【Ⅰ 衣装】
- 武田佐知子 矢田尚子
津田大輔 伊藤純
菅谷文則 堤一昭
- 【Ⅱ 信仰】
- 竹居明男 稲城正己
松浦清 藤田明良
榊原小葉子 高島幸次
- 【Ⅲ 古代史の諸相】
- 市大樹 井上勝博
坂江涉 松下正和
高橋明裕
- 【Ⅳ 女性】
- 今津勝紀 鈴木則子
岡本淳子 山崎明子
小橋玲治 平松秀樹
- 【Ⅴ 文化の交錯】
- 辻尾榮市 辻尾千曉
高嶋朋子 中井精一
河野未央 中井祥雅
古谷大輔

▼A5判・六八八頁／本体二二、〇〇〇円

料紙と書

東アジア書道史の
世界

島谷弘幸 (東京国立博物館副館長) 編

東アジアの書道史における料紙と書風に関する総合的研究。

日本の書においては古筆や写経を中心に、中国や韓国の書においては装飾料紙を用いたものを中心とし、各国における書の時代変遷とともに中国や韓国からの影響といった点もふまえた書風の分析を行う。さらに、料紙装飾に関する科学的調査と、書の内容に関する文学的・歴史的に調査を行い、個別の作品を人文・自然諸科学の方法によって総合的に分析。
図版篇では貴重な装飾料紙の文様を豊富な写真図版で紹介。

【図版篇】

舶載の唐紙／日本製の唐紙

【データ篇】

粘葉本和漢朗詠集 料紙装飾一覽

古今和歌集序 (卷子本) 料紙装飾一覽

和漢朗詠集卷下 (益田本) 料紙装飾一覽

古今和歌集 (元永本) 料紙装飾一覽

【論文篇】

古筆における伝統と創造―世尊寺家を一例として
料紙について―古写経を中心に

「粘葉本和漢朗詠集」と「金沢本万葉集」にみる料紙の装飾と文様
―雲母摺り文様の和様化の一過程の考察を含めて―

中国書法史における装飾加工紙について
日本の料紙装飾の技法における受容と発展について
料紙を中心とした「平家納経」鑑賞の記録
下絵装飾と書



内 容

序 論	第一章 官 符
第一章 付 章	第二章 任官関係文書に見る当事者主義
第二章 省 符	第三章 地方官司の符
第三章 序 宣	第四章 下 文
第四章 平行文書	第五章 上甲文書
第五章 終 章	第六章 参考文献一覽／掲載写真一覽／掲載史料一覽／索引

わたなべ・しげる…一九七三年生。明治大学文学研究科史学専攻(博士後期課程)単位修得退学。現在、京都造形芸術大学非常勤講師。

▼A5判・四八〇頁／本体九、二〇〇円

日本古代文書研究

渡辺滋著

【2月刊行】

古代中国から文書主義を継受した段階にはじまり、最終的にそれを換骨奪胎して日本的な新秩序として再編成するまでの諸過程を、日本古代社会で作成・利用されたおもな文書形式(符・序宣・下文、移、牒、解など)を対象として分析。古代社会における文書の機能に関する最新の研究成果を提示するとともに、機能論的な視角によって文書主義の運用を考察することで、古代から中世への移行にかかわる日本社会の特質に迫る。



源平の時代を 視る

磯水絵・小井土守敏・小山聡子編
二松學舎大学学術叢書

二松學舎大学附属図書館所蔵

奈良絵本『保元物語』『平治物語』を中心に

二松學舎大学東アジア学術総合研究所での共同プロジェクト「二松學舎大学附属図書館蔵 奈良絵本『保元物語』『平治物語』の翻刻と研究」。本書は、その研究の軌跡と成果をまとめた論集。



奈良絵本『保元・平治物語絵巻』について (石川 透)

第1部 二松學舎大学附属図書館所蔵の

奈良絵本『保元物語』『平治物語』の諸相

二松學舎大学附属図書館蔵奈良絵本

『保元物語』『平治物語』について (小井土守敏)

二松本『保元物語』挿絵についての一考察

二松本『保元物語』『平治物語』挿絵の天皇表現について (山本陽子)

描かれた『保元物語』『平治物語』の世界 (山口久徳)

奈良絵本『平治物語』の大路渡 (小山聡子)

第2部 奈良絵本と軍記物語

奈良絵本『保元物語』『平治物語』の挿絵について

奈良絵本・絵巻『保元物語』における崇徳院像

物語草子の制作と享受層 (磯水 絵)

『保元物語』『平治物語』の諸本展開と熊野信仰

金刀本保元物語の合勘音振仮名と『落葉集』 (山田 雄司)

『愚管抄』と『保元物語』『平治物語』をめぐる試論 (恋田 知子)

源平盛衰記と絵画資料 (源健一郎)

(佐藤 進)

(松尾 葦江)

【3月刊行】

▼A5判・二七八頁／本体四、八〇〇円

仏教美術を学ぶ

中野玄三・加須屋誠著

【1月刊行】

中野美術史学の軌跡を、加須屋誠との対談をおして振り返り、仏教美術を学ぶことの課題・方法・魅力を収録。ソフトな文体で読みやすく、仏教美術の入門書としても最適。



第一章 神護寺薬師如来立像をめくって

神護寺薬師如来立像の姿かたち／木彫発生の歴史的背景／厭魅と悔過／神護寺薬師如来立像の造像理由／異説と反論

第二章 六道絵と来迎図

卒業論文にまつわる思い出／仏名懺悔／北野天神縁起絵／天台宗の六道絵／閻魔天から閻魔王へ／山越阿弥陀図／転法輪印阿弥陀来迎図／鏡弥勒像

第三章 密教の絵画と図像

密教図像の研究／十二画像と不動明王画像／曼荼羅の発見／再び密教図像について

第四章 社寺縁起絵の世界

社寺縁起絵とはなにか／社寺縁起絵の成立／縁起絵巻と掛幅縁起絵／奈良国立博物館「社寺縁起絵」展の思い出

第五章 東アジアの動物表現

美術と動物とのかわり／日本と中国の発掘品にみる動物表現の違い／鳥獣戯画の筆者は誰か／涅槃図の系譜

付録1 中野玄三自筆「山越阿弥陀図(京都・禅林寺)」調書

付録2 京都府亀岡市・出雲大神宮蔵「男神(伝大国主命)」坐像 紹介

中野玄三論(加須屋誠)

▼A5判・三四八頁／本体三、〇〇〇円

なかの・げんぞう……一九二四年生。嵯峨美術短期大学名誉教授。かすや・まこと……一九六〇年生。奈良女子大学教授。

怨霊・怪異・伊勢神宮

山田雄司著

〔5月刊行予定〕

中世社会に大きな意味を持っていた怨霊・怪異。その諸相を歴史的に跡づけ、さらには親鸞や伊勢神宮をも射程に入れて集大成する。

1 怨霊

- 第1章 怨霊の思想
- 第2章 怨霊への対処―早良親王の場合を中心として―
- 第3章 怨霊から神へ―菅原道真の神格化―
- 第4章 怨霊―『今昔物語集』の事例を中心に―
- 第5章 源頼朝の怨霊観
- 第6章 讃岐国における崇徳院伝説の展開
- 第7章 怨霊と怨親平等との間

2 怪異

- 第8章 鎌倉時代の怪異
- 第9章 平家物語・保元物語・平治物語の「怪異」
- 第10章 怪異と穢との間―寛喜二年石清水八幡宮落骨事件―
- 第11章 親鸞における神と鬼神
- 第12章 穢と不浄をめぐる神と仏

3 伊勢神宮

- 第13章 伊勢神宮の中世の意義
- 第14章 中世伊勢国における仏教の展開と都市
- 第15章 院政期の伊勢神宮と齋宮―怪異をめくつての比較―
- 第16章 室町時代伊勢神宮の怪異
- 第17章 足利義持の伊勢参宮
- 第18章 国阿上人の見た伊勢
- 第19章 室町時代の災害と伊勢神宮

▼A5判・四二〇頁／本体七、〇〇〇円

やまだ・ゆうじ…一九六七年度岡山県立三重大学文学部講師を経て三重大学文学部教授。

増補 陰陽道の神々

斎藤英喜著

佛敎大学鷹陵文化叢書17

コロンビア大学での発表をもとにした論考「牛頭天王の変貌と「いざなぎ流」を収録して増補再版。知られざる陰陽道の神々の来歴と素顔を平易に説く。

▼四六判・三五六頁／本体二、三〇〇円

祇園祭の中世 室町・戦国期を中心に

河内将芳著

祇園会の見物という行為の検討により、その特質をうきほりにし、戦国期の祇園祭の再興の意味や、「圖取」の実態等を明かす。

▼A5判・三二六頁／本体四、五〇〇円

後鳥羽院政の展開と儀礼

谷昇著

後鳥羽天皇（上皇）の政治課題と政策理念が、公事と修法・寺社参詣参籠等宗教儀礼の中に具現しているとする視点から、それらがはたした政治的役割を個別具体的に検証。

▼A5判・三二八頁／本体六、〇〇〇円

散所・声聞師・舞々の研究

世界人權問題研究センター編

散所の人々が携わった芸能・陰陽道などのかかわりを含めて、文献・絵画・地図の綿密な分析をこころみ、実態を浮きほりにする。

▼A5判・五九〇頁／本体八、二〇〇円

王権と神祇

今谷明編

天皇制や大嘗祭、中世神祇史について、中世日本紀や神道書の考証も重ねた意欲的な論集。

▼A5判・三四八頁／本体六、五〇〇円

『作庭記』と

日本の庭園

白幡洋三郎編

〔4月刊行〕

庭園は世界を映す鏡である——。日本最古の作庭理論書として知られる『作庭記』には、中世の人々の作庭技術のみならずその背後に宿る思想・美意識が反映している。そうした着想から企画され、『日本庭園を通して古代・中世の自然観』の発見を試みた国際日本文化研究センターのシンポジウム「日本庭園と作庭記」の成果。

日本庭園の「誕生」と『作庭記』の意義
白幡洋三郎

第一部 始原

華林園の記憶 多田伊織
祭祀と饗宴の庭 原田信男
臨池伽藍の系譜と浄土庭園 小野健吉



第二部 創造

『作庭記』原本の再生 飛田範夫
浄土庭園と『作庭記』と『祇園図経』 外村 中
『作庭記』にみる禁忌・陰陽五行・四神相応 水野香紀

第三部 成立

名所を詠む庭園は存在した 錦 仁
四方四季と三時殿 荒木 浩
鳥羽離宮庭園から見た鳥羽上皇の浄土観 鈴木久男
幻の庭園 原口志津子

第四部 展開

鎌倉時代における離宮および山荘と庭園 豊田裕章
南北朝時代の臨濟宗幻住派・金剛幢下における境内空間 榎本 涉
露地考 陸 留弟

▼A5判・三六四頁／本体五、〇〇〇円

中世後期の香文化

香道の黎明

本間洋子著

〔5月刊行〕

本書では、香（こう）を炷き鑑賞する催しである香会と香木・薫物の贈答を香文化として捉え、香道の発生期の一次史料を基に、「香道の祖」とされる三條西実隆や「香道志野流の祖」志野宗信と香との関係の再検討、「香会」の具体的内容についての考察、天皇への香木献上や天皇からの薫物・匂い袋の下賜を数量的かつ具体的に考察する三視点から、中世後期の香文化を解明する。香道について初めての実証的な歴史的研究。

内 容

- 第一章「香道の祖」三條西実隆についての再検討
- 第二章「香道志野流の祖」志野宗信についての再検討
- 第三章 応仁の乱後の禁中香会
——「お湯殿の上の日記」にみられる香会記事——
- 第四章 禁中香会にみられる組香の形態
——十炷香と系図香——
- 第五章 源氏香の誕生
- 第六章 天皇に対する香木の献上
——「お湯殿の上の日記」から——
- 第七章 蘭奢待の献上と下賜
- 第八章 天皇からの薫物・匂い袋下賜
——「お湯殿の上の日記」から——
- 第九章 中世後期の香道具・灰

▼A5判・四四八頁／本体八、二〇〇円

ほんま・よつこ……群馬県生。武蔵大学大学院人文科学研究科博士後期課程単位取得退学、博士（人文学）。臭気判定士。現在、武蔵大学総合研究所研究員。

室町幕府の東国政策

杉山一弥著

【3月刊行】

従来の中世東国史研究では、鎌倉公方を中心とした鎌倉府体制が注目されてきた。これに対し本書は、室町幕府の東国政策という視点から室町期東国社会をとらえ直し、その焦点を平時・戦時それぞれの東国の儀礼と秩序、東国における足利氏一族庶子の存在意義、室町幕府・鎌倉府の境界領域ならびに政治・経済的に競合する地域社会における諸階層の動向にあわせて再検討する。

第一編 室町期東国の儀礼と秩序

第一章 室町幕府における錦御旗と武家御旗

第二章 『鎌倉年中行事』にみる鎌倉府の着装規範
— 鎌倉公方の服飾を中心として —

第二編 室町期東国の足利氏一族

第一章 稲村公方と南奥社会

第二章 篠川公方と室町幕府
補論 堀越公方の存立基盤— 経済的側面を中心として —

第三編 室町幕府の東海・南関東政策

第一章 室町幕府奉公衆葛山氏

第二章 室町幕府と甲斐守護武田氏
第三章 室町期上総武田氏の興起の基底— 武田信長の動向を中心として —

第四編 室町幕府の東北・北関東政策

第一章 室町幕府と下野「京都扶持衆」

第二章 室町幕府と常陸「京都扶持衆」
第三章 室町幕府と出羽大宝寺氏

▼A5判・三八八頁／本体七、二〇〇円

すぎやま・かずや

一九七三年生。國學院大學大学院文学研究科日本史学専攻博士課程後期単位取得満期退学。博士（歴史学）。現在、國學院大學文学部兼任講師。

在京大名細川京兆家の政治史的研究

浜口誠至著

【4月刊行】

戦国期に室町幕府の政策決定に参画した大名を「在京大名」と規定し、その中でも代表的な存在である細川京兆家の政治的位置を明らかにすることで、戦国期幕府政治の構造的性質を解明する。

まずは、幕政を将軍・大名による共同執政という観点から捉え直し、両者を一体的に検討するために幕府儀礼に注目、次に、細川京兆家独自の政治動向である奉書による裁許の補完と幕政代行を検討することで、細川京兆家の政治的位置の解明を図る。

最後に明応の政変以前からの在京大名の政策決定への関与と動態的に考察、武力偏重の幕府政治史を相対化する。

第一章 戦国期の幕府儀礼と細川京兆家

猿楽興行と在京大名／大名邸御成と在京大名／足利将軍家元服儀礼と在京大名

第二章 細川京兆家奉行人奉書による幕政の補完と代行

室町幕府奉行人奉書と細川京兆家奉行人奉書／細川京兆家奉行人奉書の社会的効力／細川京兆家奉行人奉書発給の背景／細川京兆家の政治機構

第三章 義植後期・義晴前期の幕府政治と細川高国

義植後期の幕府政治／義晴前期の幕府政治—「御作事方日記」を中心に—

▼A5判・三三八頁／本体六、五〇〇円

はまぐち・せいじ

一九八二年三重県生。筑波大学大学院博士課程人文社会科学研究科修了。博士（文学）。現在、東京大学史料編纂所技術補佐員ほか。

日本中世の領主一揆

吳座勇一著

南北朝内乱以降、あらゆる階層、あらゆる地域において一揆が結ばれたが、最初に時代を牽引したのは年貢公事の徴収者にして地域社会の治安維持者であった在地領主による一揆、つまり「領主の一揆」であった。したがって国人一揆をはじめとする「領主の一揆」は南北朝以降の地域社会を規定する中心的な要素といえ、これまで多くの研究が積み重ねられてきた。本書はその蓄積の上に、「領主の一揆」の構造・機能・結合論理を解明し、新しい国人一揆論を提示しようとする。



序 中世一揆研究の新視角

第1部 〈領主の一揆〉の構造と機能

第1章 伊勢北方一揆の構造と機能

第2章 隅田一族一揆の構造と展開

第3章 松浦一揆研究と社会集団論

第2部 〈領主の一揆〉と一揆契状

第4章 奉納型一揆契状と交換型一揆契状

第5章 親子契約・兄弟契約・一揆契約

第6章 契約状と一揆契状

第3部 戦国大名・惣国一揆への展開

第7章 領主の一揆と被官・下人・百姓

第8章 乙訓郡「惣国」の構造

終章 南北朝～室町期の戦争と在地領主

【3月刊行】

▼A5判・三八〇頁／本体七、二〇〇円
 ごさ・ゆういち：一九八〇年東京都生系研究科研究員。著書に『一揆の原理―日本中世の一揆から現代のSNSまで―』（洋泉社、二〇一二年）『戦争の日本中世史―「下剋上」は本当にあったのか―』（新潮社、二〇一四年）。

住心院文書

【4月刊行】

首藤善樹・坂口太郎・青谷美羽編

聖護院門跡の院家先達として、全国的に広大な霞を所有していた京都の住心院に現蔵される貴重な古文書や、出来る限りの旧蔵文書も採集し、若干の関連史料をくわえて、修驗道史を研究する上で根本史料となる文書群二〇二点を活字化。

【収録文書】 関東下知状／法輪院良瑠御教書／甲斐国武田氏熊野参詣交名写／今川氏親書状／聖護院道増書状／浅黄貝緒免許状／小山田信有書状／平手政秀書状／穴山祐清書状／今川義元書状／毛利元就書状／熊野参詣道先達代官職安堵状写／武田義信書状／持福院有誓、新熊野成慶連署書状草案／武田信玄書状／足利義昭御内書／徳川家康黒印状 他

▼A5判・二三〇頁／本体六、〇〇〇円

日本近世の宗教と社会

菅野洋介著

本所權威の在地社会への浸透、在地社会における諸宗教の共存と対抗、民衆宗教の展開とそれを規定する社会情勢、そして在地寺院など宗教施設の「場」としてのあり方を追求する。

▼A5判・三八〇頁／本体七、八〇〇円

南都寺院文書の世界

勝山清次編

東大寺宝珠院（法華堂文書・宝珠院文書）と興福寺一乗院坊官二条家（一乗院文書・一乗院御用日記）に伝来した文書の3年間に渡る調査・研究の成果をまとめた一書。【内容】宝珠院文書の世界／興福寺とその周辺／史料翻刻編（寛英訴訟上洛日記／寛英訴訟上洛日記紙背文書／摂津国長洲莊悪党関係史料）

▼A5判・三五〇頁／本体五、八〇〇円

朱印船貿易絵図の

研究

〔3月刊行〕

菊池誠一編 (昭和女子大学人間文化学部教授)

一七世紀の日本と東南アジアの交易、ベトナムの港町ホイアンに存在した「日本町」の様子を描いた二つの絵図の精彩なカラー図版にくわえ、美術史・歴史学および考古学など多彩な研究者による六篇の論考を収録。



■ 図版編 ■

名古屋市情妙寺所蔵「茶屋交趾貿易渡海絵図」

九州国立博物館所蔵「朱印船交趾渡航図巻」(新出史料)

ベトナム・ホイアンの町並みと日本関係史料

■ 論考編 ■

情妙寺所蔵「茶屋交趾貿易渡海絵図」について

黒田 泰三 (出光美術館学芸部長)

九州国立博物館所蔵「朱印船交趾渡航図巻」について

藤田 励夫 (文化庁文化財部美術学芸課文化財調査官)

考古学調査の成果からみた朱印船貿易絵図

二つの朱印船貿易絵図に見る服飾描写について

安蔵 裕子 (昭和女子大学人間文化学部教授)

絵図に描かれた島と燕・クラオチャムの燕巣採取

グエン・ヴァン・キム (ハノイ国家大学教授) (訳：菊池誠一)

「茶屋交趾貿易渡海絵図」に描かれた象について

ファン・ハイ・リン (ハノイ国家大学教授) (訳：阿部百里子)

▼ A4判横綴・一〇四頁／本体七、八〇〇円

南蛮・紅毛・唐人

一六・一七世紀の東アジア海域
中島楽章編

一六・一七世紀の東アジア海域は、多様なエスニシティをもつ人々が混在し、彼らの活動を通じて、モノやヒト、そして文化や情報が海をこえて運ばれた。

本書では「南蛮」「紅毛」「唐人」、そして彼らと接した「倭人」たちが残した証言を、さまざまな視角から多面的に論じることにより、東アジア海域における「紛争と交易の時代」のダイナミズムを描きたす。



序 論 「交易と紛争の時代」の東アジア海域

中島楽章

ムラカ王国の勃興

山崎 岳

一五四〇年代の東アジア海域と西欧式火器

中島楽章

朝鮮・双嶼・薩摩

岡本 真

堺商人日比屋と一六世紀半ばの対外貿易

鹿毛敏夫

ドイツ・ポルトガルに現存する戦国大名絵画史料

岡本 真

一六・一七世紀のポルトガル人によるアジア奴隷貿易

鹿毛敏夫

ヴィクトリア・デ・アリス ある中国人女性奴隷を追って

鹿毛敏夫

ルシオ・デ・ソウザ「小澤一郎・岡美穂子訳」

近世初期東アジア海域における情報伝達と言説生成 藤田明良

一六六五年オランダ船普陀山襲撃事件を中心に 藤田明良

清朝の台湾征服とオランダ東インド会社 鄭維中「郭陽訳」

施琅の「台湾返還」密議をめぐる一 鄭維中「郭陽訳」

ポルトガル人のアジア交易ネットワークとアユタヤ 岡美穂子

ポルトガル人のアジア交易ネットワークとアユタヤ 岡美穂子

【1月刊行】

▼ A5判・四一八頁／本体六、八〇〇円

茶の湯 恩籙抄

戸田勝久著

【5月刊行予定】

裏千家今日庵業跡として、教授者（茶名宗安）と併せて、茶の湯の研究に従事してきた著者。

本書は、その近年の業績を集大成。今日庵歴代一人ひとりについての論考「裏千家今日庵歴代」、茶の湯ゆかりの人物をめぐって茶の湯の精髓が語られる「茶の湯掃苔抄」、時空を自在に行き来する「江戸東京茶の湯散歩」の3部構成。

第一部 裏千家 今日庵歴代

『南方録』にみる露地の思想／四座役者目録の少庵／茶室に托す侘茶の心／仙叟と金沢／常叟宗室の軌跡ほか（計二三篇）

第二部 茶の湯掃苔抄

武相荘の白洲正子／柳宗悦の「茶衣メサデ」／宗観井伊直弼と水戸徳川家／加藤六美学長の風逸／華頂宮尊超法親王ほか（計一二篇）

第三部 江戸東京茶の湯散歩

【深川編】

俳諧の茶事 海辺橋・採茶庵跡／御座船の数寄 隅田川遊覧／清澄庭園 岩崎家の文化／靈巖寺 茶翁松平定信ほか（計八篇）

【日本橋編】

空日庵跡 新堀の田中宗ト／河村瑞賢 新堀新川茅場町／琴土 常真居士 八丁堀組同心今泉氏ほか（計一六篇）

▼A5判・六四〇頁／本体五、五〇〇円

茶の湯 連翹抄

戸田勝久著

裏千家今日庵業跡として、教授者と併せて、茶の湯の研究に従事してきた著者の業績。

▼A5判・六〇四頁／本体七、六〇〇円



西鶴の文芸と茶の湯

石塚修著

浮世草子作家の嚆矢であり江戸時代前期を代表する作家の一人、井原西鶴。その文芸作品に、いかに当時の茶の湯文化が反映されていたのか、西鶴が浮世草子作家になる以前の俳諧師時代、さらに『好色一代男』から遺稿集にいたるまでの浮世草子作品をとりあげ、その影響関係を検証。西鶴は、じつは千利休に代表される「わび茶」の美意識に強く影響を受けていた。その茶の湯観は芭蕉の求めた「わび」にも通じるものであり、それが西鶴作品の人間観照の鋭さにも深く関わっていたのである。

第一部 俳諧師西鶴と茶の湯

第一章 俳諧師西鶴と茶の湯文化

第二章 西鶴の茶の湯文化への造詣

第二部 西鶴作品にみられる茶の湯

第一章 『好色一代男』にみられる茶の湯文化

第二章 『西鶴諸国ばなし』と茶の湯

第三章 『武家義理物語』巻三の二「約束は雪の朝食」再考

第四章 『日本永代蔵』巻四の四「茶の十徳も一度に皆」考

第五章 『日本永代蔵』の「目利き」譚

第六章 『西鶴名残の友』巻五の六「入れ歯は花の昔」にみる茶の湯文化

第七章 西鶴と「わび」

いつしか・おさむ……一九六一年生。筑波大学人文社会系教授。

【3月刊行】

▼A5判・三一六頁／本体六、〇〇〇円



近世の禁裏と都市空間

岸泰子著

禁裏が関係する信仰や儀礼の場・空間の特性に注目し、都市を基盤として存在した禁裏、禁裏によって形成・維持された都市、という両側面からなる近世京都の特性を中世・近代への展開も視野に入れて明らかにする。都市・建築史学の手法に限定することなく、近世京都の都市空間の特徴を多角的・包括的に論じた一書。



第一部 禁裏と信仰——内侍所・御霊社

(一)室町後期・戦国期の内侍所 (二)近世の内侍所仮殿下賜と上・下御霊社の社殿拝領について (三)寛政度内裏以降の内侍所仮殿の造営・下賜と神嘉殿

第二部 禁裏と王権——櫛・参詣

(一)中世後期の天皇崩御と触穢 (二)近世前期の天皇崩御と内侍所(御八講・儀法講の場) (三)近世禁裏御所と都市社会 楠章(一)室町・戦国期における

第三部 禁裏と都市——造営・遷幸・参詣

(一)承応度・寛文度内裏造営と非藏人 (二)近世京都の都市空間再生と禁裏御所普請 (三)安政度内裏遷幸と都市空間 (四)近世前期の上・下御霊祭祀行列と天皇

きし・やすこ：一九七五年生。現在、九州大学大学院芸術工学研究院准教授。

【3月刊行】

▼A5判・三二〇頁／本体六、四〇〇円

近世妙心寺建築の研究

平井俊行著

京都府教育庁文化財保護課の修理技術者として、妙心寺建築物の保存修理に携わるなかで積みかさねてきた研究をまとめた一書。

▼B5判・三七六頁／本体九、五〇〇円

大工頭中井家建築指図集

谷直樹編著

江戸幕府の京都大工頭を代々勤めてきた中井家に伝わる建築指図をまとめる。図版は五一七点を大判で収録し、解説を付した。

▼B4判・三六〇頁／本体一八、〇〇〇円

中世京都の空間構造と礼節体系

桃崎有一郎著

中世の京都で実践された礼節体系の考察を通じて、中世京都の空間構造を明らかにし、室町殿権力の形成・展開過程をも論ずる。

▼A5判・五八四頁／本体七、二〇〇円

風俗絵画の文化学Ⅱ

松本郁代・出光佐千子・杉子女王編

美術史・歴史学・文学・文化人類学等を専門とする研究者が、それぞれの専門性を生かした風俗絵画分析を進め、粘り強く議論を繰り返して生まれた学際的文化研究。

▼A5判・四五〇頁／本体七、〇〇〇円

京都中世都市史研究

高橋康夫著

中世京都都市史の諸問題を、辻子の発生と展開や平安京の再開発などの検討を通してさぐり、今日の歴史的都市の保全修景計画をも射程に入れて中世都市像を追究した一書。

▼A5判・五四〇頁／本体八、八〇〇円

思文閣史学叢書

アーカイブズの 構造認識と編成記述

国文学研究資料館編

【4月刊行】

人類が社会的な営みのなかで生み出してきた文書量は膨大である。アーカイブズは人類共有の知的遺産であり、その保存・公開を支えるアーカイブズ学はまさに諸学のための基礎学といえる。本書はとくに重要となるアーカイブズ群の構造的な理解（構造認識）とその表示（編成記述）について、第一編で研究動向や理論的な整理をし、第二・三編で近世・近代の多様な文書群をとりあげ実践的な議論を展開する。国文学研究資料館で行われた共同研究の成果。

内 容

- 第一編 アーカイブズの編成記述——理論と動向**
 アーカイブズ機関における編成記述の動向と課題
 アーカイブズの内的秩序構成理論と構造分析の課題
 アーカイブズ編成・記述の原則再考
第二編 アーカイブズの構造認識と編成記述論
 日本近世・近代在地記録史料群の階層構造分析方法について
 商家文書の史料群構造分析
 名主家文書における文書認識と目録編成
 近現代個人文書の特性と編成記述
 組織体の機能構造とアーカイブズ編成
第三編 近世の記録管理とアーカイブズ
 転封にみる領知支配と記録
 近世の商家と記録管理
 萩藩士家における「御判物・御証文」の保存と管理
 近世清水八幡宮の神人文書と文書認識
 近世アーカイブズの紙質調査と組織体の料紙

太田 富康
柴田 知彰
森本 祥子

渡辺 浩一
西村慎太郎
工藤 航平
加藤 聖文
清水 善仁

大友 一雄
山崎 宏介
西崎 一郎
東 昇

青木 睦

▼A5判・四〇〇頁／本体六、七〇〇円

近世京都近郊の村と百姓

尾脇秀和著

佛教大学研究叢書22

本書では、京都近郊に位置し、公家・寺院領を中心とする相給村落であった山城国乙訓郡石見上里村（現・京都市西京区大原野石見、上里）と、同村百姓にして公家家来でもあり、庄屋・医師・手習師匠としても活動した大島家を研究対象にとりあげる。建前と実態という「表裏」の運用により、社会の「穏便」を実現しようとする意識や調整に着目して、近世百姓の変容と実態を多面的に明らかにする。

近世百姓社会の「分」を維持安定すべく、表面的な「穏便」が図られた「表裏」意識と調整のあり様を、残された日記類から緻密かつ多角的に分析し、その変容と実態を明らかにする。

内 容

- 序 章 本書の研究視角と構成
 第1章 相給支配構造と株百姓の実態
 第2章 文政期の村方騒動と百姓の忤人兩名
 第3章 村役人層の変容
 第4章 大島家の忤人兩名
 第5章 大島家の学芸活用
 第6章 在方医師の活動実態
 第7章 在方医師と村
 終 章 まとめと課題
 付 論 大島家の病と地域の医療

【3月刊行】

▼A5判・二九四頁／本体四、八〇〇円

おわき・ひでかず……一九八三年京都府生まれ。佛教大学文学部史料卒業、佛教大学大学院文学研究科博士後期課程修了、博士（文学）。現在、佛教大学総合研究所特別研究員。

歴史における周縁と共生 —女性・穢れ・衛生— 鈴木則子編

本論集では、日本の歴史のなかで女性の周縁化（地位の劣化）が進行していく過程を、その身体に対する認識の歴史的变化に着目しつつ、明らかにする。

仏教と神道等の諸宗教における女性認識の諸相、血縁などに対する地域社会の対応の展開、伝統的医学・近代医学双方からみた病氣や女性身体観の変容、近代衛生思想における女性役割の位置づけ等について、新しい視点から提示した共同研究の成果。



I 宗教／儀礼／穢れ

善光寺と女人罪業観

富士講・不二道の女性不浄観批判

奈良の伝統的祭礼と女性

古代浴衣復元のための覚え書き

女性と穢れ

宗教都市におけるケガレの操作と「清浄」概念の共有

近世における北野社門前の社会構造

II 医学／衛生

中国医学における感染症認識

江戸の結核

衛生思想の中の女性

眼の感染症にみられる女性観

規範としての「自然」

不妊の原因としての淋病

「青鞨」への道

(平 雅行)

(宮崎ふみ子)

(武藤康弘)

(武田佐知子)

(加藤美恵子)

(濱千代早由美)

(三枝暁子)

(白杉悦雄)

(鈴木則子)

(瀧澤利行)

(尾鍋智子)

(梶谷真司)

(林 葉子)

(池川玲子)

【4月刊行】

▼A5判・三七〇頁／本体六、八〇〇円

牛と農村の近代史 家畜預託慣行の研究 板垣貴志著

明治以降の近代化のなかで発展から取り残された中国山地。そこでは前近代のベールに包まれた家畜預託慣行が急激に拡大していた。本書は、牛を介して取り結ばれる人々の社会関係を明らかにし、それが近代農村で果たした歴史の意義を解明。そして歴史の片隅へ押し流されながらも、地域社会の調和と共存のために努めた名もなき農民群像を描く。いくなれば、進歩のかけで退歩しつつあるものを見定めた宮本常一民俗学に共鳴する社会経済史である。



内 容

序 章 課題と視角

第一章 家畜小作概念の再検討

第二章 牛生産地域における家畜所有の歴史的展開

第三章 中国山地における蔓牛造成の社会経済的要因

第四章 中国山地における役牛の売買流通過程と牛馬商

第五章 鞍下牛慣行による役牛の循環と地域社会

第六章 中国山地の預け牛関係にみる信頼・保険・金融

終 章 家畜預託慣行の盛衰と近代日本農村

附 論 板垣家文書の史料群構造

聞き書きノート

索引

▼A5判・二六六頁 本体四、八〇〇円

いたがき・たかし：一九七八年島根県生。神戸大学大学院文化科学研究科修了。現在、神戸大学大学院人文学研究科特命講師。

通天楼日記

横山松三郎と明治初期の写真・洋画・印刷
富坂賢・柏木智雄・岡塚章子編

〔4月刊行〕

通天楼日記



黎明期の日本写真史・洋画史・印刷史の実態を明らかにする一級の史料群である、横山松三郎（一八三八〜八四）が上野池之端に開業した写真館兼私塾・通天楼での出来事を記した「通天楼日記」の翻刻と影印等を収載。

「横山松三郎は、洋画の開拓者高橋由一や写真史に名を残す島霞谷と同様、没するまで確乎たる洋画家でありつづけた。画像の近世的至福性と統一性を客観的に破壊する写真技術の先駆者たる横山が、なおかつ洋画にしか求め得なかつた逼真性を起える美とはなんだったのか、これら画像資料を歴史的に考える上での不可欠な史料として私は本書を推薦する」

〔宮地正人氏 推薦文より〕

内容

〔史料翻刻〕 明治六年通天楼日記／明治七年通天楼日記／明治十二年日記／横山松三郎自筆手記／横山先生履歴草稿

〔通天楼日記影印〕

〔論考〕 横山松三郎と通天楼―「明治六年通天楼日記」を素材として（富坂賢）／通天楼をめぐる人々―洋画とのかかわりを中心として（柏木智雄）／横山松三郎事績―横山家所蔵資料を中心に（岡塚章子）

とみさか・けん（九州国立博物館学芸部文化財課長）
かしわぎ・ともお（横浜美術館学芸グループ長）
おかつか・あきこ（江戸東京博物館学芸員）

▼A5判・六〇二頁／本体一六、四〇〇円

劇場の近代化

帝国劇場・築地小劇場・東京宝塚劇場

永井聡子著

〔5月刊行〕

明治・大正・昭和初期における劇場の近代化に大きな影響を与えた三つの劇場、帝国劇場（明治四四年開場）・築地小劇場（大正一三年開場）・東京宝塚劇場（昭和九年開場）を取り上げ、当時のさまざまな言説、図版、写真、インタビューなどの資料を読み解き、西洋の劇場近代化過程とも比較しながら日本の劇場の近代化の特色を描きだす。

内容

第1章 帝国劇場以前の歌舞伎劇場に見られる近代化

る近代化

第2章 帝国劇場に見られる近代化

第3章 築地小劇場に見られる近代化

第4章 東京宝塚劇場に見られる近代化

第5章 帝国劇場・築地小劇場・東京宝塚劇場に見られる「劇場」の近代化



ながい・さとこ：名古屋大学大学院工学研究科建築学専攻博士後期課程修了（工学博士）。現在、静岡文化芸術大学文化政策学部准教授。

▼A5判・二二〇頁／本体三、五〇〇円

日仏文学・美術の交流

―「トロンコワ・コレクシヨ」―とその周辺―

石毛弓・柏木隆雄・小林宣之編

大手・前大学比較文化研究叢書⑩

一七世紀に設立された歴史あるパリ国立高等美術学校と大手前大学との提携記念として開催された「日仏文化交流シンポジウム」の成果。明治二七年から明治四三年にかけて日本に滞在、多くの和画や美術品を蒐集、研究したE・トロンコワのパリ国立高等美術学校所蔵コレクシヨンを柱に、日仏美術の交感を論じた七篇を日仏両言語で収録。カラーを含む図版を多数掲載。

欧米の美術館・博物館が所蔵する京焼について

岡佳子

―一七世紀を中心に―

ロカイユ様式と東洋

―一八、一九世紀フランスの蒐集家たちに見る趣味のアヴァンチュール―

マリィカトリヌ・サユット

マラケ河岸の「スイィチュウヰカ」

―パリ美術学校と明治期の日本― エマニエル・シュヴァルツ

フランスにおける日本学の草分けレオン・ド・ロニーについて

―ロニーの日本文化紹介をめぐる― クリス・ベルアド

フロベールとボザール教授ボナ 柏木加代子

トロンコワ・コレクシヨンの花扇使者図について 盛田帝子

エマニエル・トロンコワの和本科レクシヨ

―一九世紀フランスにおける江戸出版文化史を構築する試み―

クリストフ・マルケ

【4月刊行】

▼A5判・二八四頁／本体二、八〇〇円

視覚芸術の比較文化

武田恒夫・辻成史・松村昌家編 大手前大学比較文化研究叢書②

源氏物語からラファエル前派まで、日欧の古代から現代までの文学テキストと絵画・工芸などとの関わりを論じる。

▼A5判・二五六頁／本体二、八〇〇円

ヴィクトリア朝英国と東アジア

川本皓嗣・松村昌家編 大手前大学比較文化研究叢書③

各近代化過程における日本・中国・朝鮮と英国との文化交流誌。

▼A5判・二八〇頁／本体三、二〇〇円

ジャポニスム入門

ジャポニスム学会編

ジャポニスムとは、一九世紀後半の日本の開国と西洋の芸術革新への希求とが符合し、西洋の芸術の諸分野にわたって与えた日本の影響をいう。本書ではこれまであまり紹介されなかった地域も含め各国別の個性的な展開をやさしく読み解き、ジャポニスムの全体像に迫る。

▼A5判・二九二頁／本体二、八〇〇円

壁紙のジャポニスム

松村恵理著

一九世紀後半から二〇世紀前半にわたる壁紙のジャポニスムをそのデザインの詳細例にそってさぐる。

▼A5判・二四〇頁／本体三、二〇〇円

岡倉天心の比較文化史的研究

清水恵美子著

ボストンでの活動と芸術思想
明治時代に美術分野で活躍した思想家、岡倉覚三（天心、一八六三―一九一三）の、特にボストンでの活動に焦点をあてて考察。

▼A5判・五四八頁／本体一〇、七〇〇円

尾谷雅比古著

〔3月刊刊〕

近代古墳保存行政の研究

近代における古墳に関し、行政という視点と、さらに行政と対峙する地域という視点から実証的に論じる。そしてその背景にある国家の理念、そしてそれに基づく施策、実施する行政行為の歴史の変遷を解明。



内 容

- 第一部 古墳保存行政の変遷
 - 第一章 近代古墳保存行政の成立
 - 第二章 近代古墳保存行政の展開
- 第二部 古墳保存行政と地域社会
 - 第三章 仲哀天皇陵墓伝承地の変遷
 - 第四章 淡輪古墳群に対する保存施策
 - 第五章 百舌鳥古墳群の史蹟指定
 - 第六章 大師山古墳の発見と顕彰
 - 第七章 九州における戦時体制下の古墳保存行政
- 関係史料集
 - 古墳墓等発掘関係布告・通牒・通達
 - 古墳墓関係法令／古墳墓等官有地化
 - 古墳墓保存建議関係／埋蔵物関係／史蹟関係

▼A5判・三三八頁／本体七、二〇〇円

おたに・まさひこ：一九五三年大阪府生。関西大学大学院文学研究科博士課程前期修了（考古学）。現在、河内長野市立図書館文化遺産普及啓発専門員。

大正・昭和期の日本政治と国際秩序

武田知己・萩原稔編

〔1月刊刊〕

大正・昭和期の日本にはいかなる選択肢があったのか。選ばれなかった選択肢は今に何を示唆するのか。大東文化大学国際比較政治研究所に集まった気鋭の研究者11名が、日本の近・現代史がはらんでいた「未発の可能性」を掘り起こす。



I 「転換期」日本の国際認識

近代日本の「新秩序」構想の〈新しき〉と〈正しき〉
 「国際主義者」という名の新渡戸稲造のイメージと実相
 一九二〇年代「外交時報」にみる日本知識人の対外認識
 戦間期のアジア・ブロック論に関する一考察

II 「転換期」の構想と現実

民衆の時代と実業精神
 日米関係と「実業之日本」
 第一次大戦後の世界秩序と日本の「改造」
 三宅雪嶺における「哲学」と「時論」のあいだ

III 中国認識の諸相

近代日本における中国認識の側面
 東亜同文書院の「未発の可能性」について
 長野朗の外事評論

たけだ・ともき：一九七〇年福島県生。大東文化大学法学部教授。
 はぎはら・みのる：一九七四年兵庫県生。大東文化大学法学部講師。

▼A5判・三九二頁／本体六、五〇〇円

武田知己

五味俊樹

伊藤信哉

大木康充

和田 守

佐賀香織

神谷昌史

長妻三佐雄

萩原 稔

武井義和

西谷紀子

死して巖根にあらば

骨も也た清からん

児玉修著

寂室元光の生涯

臨済宗永源寺の開山である寂室元光（一二九〇～一三六七）は、生涯を通じて大利に依らず、名聞利養を否定し、知的で洗練された文藻を備えた、日本禅宗史上希に見る純粹清烈の僧である。映像作家でもある著者が、その生涯を描く大河小説。

〔5月刊行〕

▼四六判・三九〇頁／本体一、八〇〇円

天翔ける白鷗

愚中周及の生涯

児玉修著

南北朝時代、中国帰りのエリートとして囑望されながら、決して権力におもねらず、ひたすら仏の道を行じ、庶民とともに生きた禅僧、愚中周及（一二三三～一四〇九）。

愚中周及に惚れ込み、自ら山川を跋涉して、忘れられた愚中の足跡をたどってきた映像作家の著者が、時代のなかで苦悩し、雪中坐禅や夜を徹する月下での立禅など、自らの仏法を打ち立てた生涯をたどり、語録ではわかりえない血の通った人間愚中を描ききった意欲作。



▼四六判・三〇六頁／本体一、六〇〇円

仏教の日本的土着

古田紹欽著

わが国にはさまざまな仏教教義や思想が渡来したが、極めて日本的な独自の仏教思想を形づくっていった。禅宗のみならず仏教思想土着の諸側面を考察。

▼四六判・三三二頁／本体二、九三三円

燃ゆらん花の美しさ 日々是れ好日

古田紹欽著

畑を耕す鎌をもつ手に、またペンを意識的にもつ。老眼ながらまだ読み書きする視力にさほど不自由はない。漫然と書き、漫然としてまた綴る……。

▼四六判・二五〇頁／本体二、五二四円

我生きて今ある命を

古田紹欽著

「これまで生き得たことによる荷物のようなもの」と称した晩年の小篇36本を収録。老いを楽しんだ著者の心意気を伝えた好著。

▼四六判・三二〇頁／本体二、五〇〇円

空花集

入矢義高著

中国文学の泰斗が折りにふれて書いた珠玉の短篇21本。【内容】陶淵明とわたし／玄沙の臨済批判／詩偈について／大拙・熊楠・慧海 ほか

▼四六判・三〇六頁／本体二、四二七円

禅語辞典

入矢義高監修／古賀英彦編著

禅語録中の難解な語句すべて（約五千五百）について、平易なことばで解説を施した画期的な辞典。漢文を読むすべての人に必携の書。

▼A5判・六〇〇頁／本体九、五〇〇円

——思文閣グループの逸品紹介——

美の縁

び

よすが



嵯峨本伊勢物語は、我が国の古典文学作品、初めての絵入り版本として刊行され、その意匠を凝らした料紙・装幀などから、美術工芸的にも高く評価されている。

この書の古活字版は、(一)慶長十三年古活字初刊本(第一種本)・(二)同再刊本(第二種本)・(三)慶長十四年古活字本(第三種本)・(四)慶長十五年古活字本(第四種本)の四種に大別される。本書は慶長十五年古活字本(第四種本)で、その中でも甲種に属するものである。意外にも第四種本の伝本は、第一種本・

◆ 嵯峨本伊勢物語 ◆

第二種本よりも少なく、七本程度、その内甲種は、国立国会図書館蔵本と東京国立博物館蔵本、大英図書館蔵本の三本が確認されるのみである。

本書は惜しくも一丁落丁し、付される後補表紙は傷んでいるものの、虫損はほとんどみられない。料紙の胡粉もよく残り、摺刷も鮮明である。その後の絵入り版本の様式を決定する画期的な作品と位置付けられるばかりではなく、流麗な活字の美しい書体、多くの挿絵を配するその趣向、そして美しい装幀など、まさに我が国を代表する版本、名物とでも言うべき作品といえよう。(思文閣出版古書部・中村知也)

思文閣墨蹟資料目録

和の美



古書画から
近代美術まで
毎月100点の名品を
通信販売にて
お届けします。

お電話もしくはホームページにてお問い合わせください。

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355
TEL(075)531-0001 FAX(075)531-5533
<http://www.shibunkaku.co.jp/>
info@shibunkaku.co.jp

残したい、伝えたい。
思文閣大交換会



思文閣大交換会は、年四回の大入札会。
お客様のもとで受け継がれた価値ある美術品
を、求めている方へとお引き合わせします。

ご出品をご希望の方は、まず査定のお申し込みを

〒605-0089 京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355
tel: 075-531-0001 satei@shibunkaku.co.jp
www.shibunkaku.co.jp/arts/

思文閣古書資料目録

※古典籍を中心に古文書・古写経・絵巻物・
古地図・錦絵など、あらゆるジャンルの
商品を取り扱っております（年4回程度
発行）。

※ご希望の方は、下記、思文閣出版古書部
までお問い合わせ下さい。



黒田長政朱印状
一幅

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355
TEL(075)752-0005 FAX(075)525-7155
<http://www.shibunkaku.co.jp/kosho/>
kosho@shibunkaku.co.jp

CONRAD JON GODLY



2014年5月10日－25日
10:00－18:00 会期中無休

ギャラリー 思文閣

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 386
TEL(075)761-0001 gallery@shibunkaku.co.jp
www.shibunkaku.co.jp/gallery/